

雲取山(2018m)へ

三峰口～雲取山～鷹ノ巣山～石尾根縦走路～奥多摩

岩井 淑

5月31日(水) 快晴

バスはすっかり緑となった荒川沿いのくねった道を登っていく。

三峰神社の登り口の大輪まで15分。バスの乗客は15人。5人が新たに乗り込み、2人が降りた。

バス停前方30m程の所に大きな一の鳥居が建っており、横にコマ犬が坐っている。どこの神社でも見掛ける光景だが、ここのコマ犬はちょっと違う。どこがどう違うかというところ、どこでも見掛けるコマ犬は江戸時代の狩野派が描いたようにもったりしているが、ここのはまずスリムであり顔もせいかなである。丁度、ドーベルマンと言ったらいいだろうか。が、やはりアとウンを表した一対には変わりがない。

荒川に架かる朱塗りの登龍橋を渡り、銅で作られた二の鳥居をくぐると杉林の中の参道はロープウェイ駅へと続いている。切り立った断崖に思わず下を覗き込むと、流れは白く泡立ち、淡青緑色に染っている。かなり速い流れだ。

ロープウェイを使わずに本来の表参道を登ると神社までは2時間、との指標が駅前に立っている。今日のところはスケジュールの関係からとりあえず、標高差680m、全長1700mのロープウェイを利用することとする。所要時間は8分である。

ロープウェイ駅の右下方には、その昔、修行僧が身を清めたといわれる「登龍の滝」が水量も豊かに落ちている。

70人乗りのゴンドラに一般客は9人であったが、小学3年生の遠足の一団とぶつかったため、キャーキャー、ピーピーと賑やかこのうえもない。ゴンドラの中から、左側に三峰神社の奥の院が置かれている妙法ガ岳を望むことが出来るが、ガイドは「妙法ガ岳、霧藻ガ峰、雲取山の三山を合わせて三峰山と呼びます」と案内していたが、この案内は間違いであって、三峰山とは妙法ガ岳、白岩山、雲取山を総称しての名前である。

昼食を摂るために三峰神社に立ち寄ってみると、とても大きな神社である。杉の大木が歴史の古さを感じさせ、拝殿の彫刻も実に見事なものである。彫刻は花鳥の他、書を書いているものや囲碁を打っているものもある。

握飯をほうばっていると、大太鼓が打ちならされ祝詞が始まった。信者数人が拝まれている。参拝人は次々と現われるが、いずれも50代～70代の人達ばかりである。そういえば、妻・彰子の生家のおふくろも今月お参りに来たとのことだった。

神社を後に雲取山に向かうが、大輪からの表参道に立派な鳥居が建っている。この特徴ある形は奈良県桜井市の三輪神社の鳥居と同一形式のものである。三峰神社と三輪神社は同じ流れをくんでいるのであろうか。

こもれびの中、カエデやブナの木を歩いていると、街中のアスファルトでは決して味わうことが出来ない、フッと沈む感じが足裏に伝わってくる。この感触がとっても好きだ。炭焼平を過ぎると道はつづら折りの登りとなり、地蔵峠へ着く頃は空は雲にすっかり覆わ

そう言われてみれば確かに鳩の鳴き声だ。

雲取ヒュッテは閉鎖されているが、脇に咲いているシャクナゲのショッキングピンクが鮮やかに眼を引きつける。10張り張ることの出来る幕営地ではキャンパーが1人ポツリと歯を磨いている。

雲取山荘に到着したのは16時30分だった。

先日NHKテノビで雲取山荘が放映されたばかりだったので、宿泊手続きをしながら「テレビ見ました。このあいだ」と言うと、おじさんは「うん。今度は7月8日にTBSの89ドキュメントで『雲取に生きる』っていうのを1時間番組でやるよ。もう撮ってあるんだ。このあいだ17時間も撮っていったから」と話してくれた。「又、見ます」と言うと「ありがとう」と言った眼鏡の奥の眼が笑っていた。

5月3日の連休にこの山荘に宿泊した3人の友人達は、ひとつの布団に4人寝かされ、まるでメザシだったとのこと。今日の宿泊者は25人とこのことで大きな山荘はガラーンとしている。雲泥の差だ。

山荘横には気象観測のための器具を入れてある百葉箱や、麓との連絡を取るための無線のアンテナが設置されている。百葉箱の中を覗き込んでみると最高温度計は16°Cを、最低温度計は0°Cをそれぞれ示していた。

また、その隣には紀行文(山行文)によって広く秩父の山々を紹介した奥秩父の先駆者・田部重治の記念碑が立っている。50cm程のレリーフとともに長崎の原爆平和記念像を創作した北村西望の書による碑文には

「奥秩父 はるか眺めて 雲取の 立ちたるわれは 若人なりし
明治42年5月15日 初めて雲取に登る
全日本山岳連盟」

と記されていた。

今日は霧藻ガ峰あたりではくもりがちだった空も、前白山を越す14時頃には太陽も顔を覗かせ、非常におだやかな日差しの中を気持ちよく歩くことが出来た1日だった。

今、この文を山荘の2階の入口近くのこたつの中で書いているが、窓を開けると西陽が差し込んでくる。山荘は赤いトタン屋根の2階建てで丸太を縦割りにしたのが側面に打ちつけてある。

食事が終わった後、おじさんはランプを燈してくれた。1階と2階に4つずつのこたつが置かれ、その上にランプが吊り下がっている。静かに静かに暗さを増していく日暮。

6月1日(木) 快晴

山小屋の朝は早い。

4時前になると、あちらでゴソゴソ、こちらでガサガサ。リュックの整理が始まる。

やがて東の空を茜色に染め、原生林のかなたから大きな太陽が現われてくる。今日も昨日に続き雲1つない快晴であり、あちこちから聞こえて来る小鳥達のさえずりも心なしか楽しそうに聞こえる。

6時からの予定の朝食も5時20分には出来上がり、ワイワイガヤガヤ賑やかなうちに終り、出発の準備をしていると、突然おじさんが「ヤマネ、ヤマネ、ほれヤマネ。今、死んだばかり。天然記念物だよ。ネズミと違って尾に毛が生えているだろう。アッ！まだ生きている。ほら、まだ眼が動いているだろう。今、水飲み場の中に落ちたんだ。博物館に持って行ってやろう」などと騒いでいる。

なるほど、おじさんの手を覗き込むと体長8cm、尾長5cm位の鼠に似た小動物から水滴が落ちている。手にとってみると背中に黒色の一直線が尾まで伸びている。これがヤマネの特徴だという。山荘にはムササビ、モモンガ、リス、なども住み着いており、以前はタヌキやアナグマもいたのでガサゴソうるさく感じることもあるが、聞こえなくなると逆にさみしくなるねーと、おじさんは言う。20分程、さまざまな体験談を聞く。

雲取山荘を後にシラビソやコメツガの原生林を急登すること15分。2017、7mの雲取山山頂へ出た。360度のパノラマである。

空はスッキリ晴れ上がり、丹沢や大菩薩の山々、富士山、雪の多い赤石岳、北岳、甲斐駒ヶ岳などの山々が連なる南アルプス、北アルプスの唐松岳も頭を覗かせ、連休にはまだだいぶ雪の残っていた浅間山の雪はもうしわけ程度にほんの少し残るだけであった。

山桜が咲きだしたばかりなのを見ると、今年は何回桜の花を見たのだろうか。その横の芽吹き出した落葉松の若葉も目に美しい。それにしても実に美しい景観だ。

小雲取山より右に分け、落葉松林の中をグングン高度を下げていく。その前をカッコウが水平に横切り、鹿が食べたものであろうか木の幹が1m30cm程の高さから綺麗に剥ぎ取られているのが、そこかしこに見受けられる。

雲取奥多摩小屋を過ぎると10帳程の幕営指定地が現われ、その先にヘリポートがある。直径20m程の○の中に大きくH印がマークされている。

落葉松のマツボックリは2cm位の小さなものなので「マツボックリの赤ちゃん」と言えば娘の愛が喜ぶだろうと思い、5個程ポケットへ入れる。梢では「ここはオイラの縄張りだ」とばかり、得意そうにさえずるホオジロ。小鳥の鳴き声のみが遠くに近くに聞こえるのみである。

1757mの七ツ山山頂へ登るとダケカンバも芽を出し始め、ウグイスの鳴き声が四方から聞こえて来る。ワラビやゼンマイなどのシダ類も、もうすっかり青みを増している。突如、誰が吹くのかポォポォ〜ンというホラ貝の韻きを聞く。結構響き渡るものだ。

山道を歩いていると時々、鹿の足跡やフンと出会う。足跡は4cm位の大きさで、牛のヒズメと同様に真中が割れている。フンは5〜8cm位の径1cm程で黒色をしているのが主だ。

鷹ノ巣避難小屋前の広場には木のがっしりしたテーブルと椅子が6組設置され、明るい休憩所だ。そこを過ぎると鷹ノ巣山を右に捲いていく道と山頂へ向かう道とにわかれるので、山頂への道を選ぶ。1737mの山頂への登りは結構きついですが、遠くにカッコウの鳴き声を、近くにウグイスの声を聞きながら登ること20分で山頂へ到着した。

見晴らしのよい南側の正面に富士山が望めるが、その姿は霞と雲の中へと隠れつつある。キジのケーン、ケーンといつかん高い鳴き声が聞こえる。これから石尾根縦走路を下り、3時間40分で奥多摩駅へと到着する予定だ。